4

連載エッセイ

なにより心のために

田村 孝子
たむらたかこ
(財) 砂防・地すべり技術センター評議員
静岡県コンベンションアーツ
グランシップ館長

今や自然保護、環境問題は誰もが緊急な課題と認識する時代となり、砂防という言葉が世界共通語であることも少しは知られてきたようです。富山市で開かれた「防災を喚起するシンポジウム」で登山家でもある医師の今井通子さんがご自分で撮られたヨーロッパアルプスの温暖化の影響を受けた雪渓の様子を見せて警鐘されたのは10年も前のことなのです。砂防ダムがどんなものか知らなかった私が、このシンポジウムのために各地の災害地を見学、勉強させていただいて日本の自然の厳しさを知ることもできました。その後の相次ぐ気象異変、災害勃発に、やっと各自治体の防災意識も変わり、危機管理が重要課題と受け取られる時代となりました。充分な備えができているかといったらまだまだではありますが、とりあえず誰もがその脅威を感じ、なにができるか考えるようになったことは大きな違いです。

このことと同じように、今私たちが一番考えなくてはならないことのひとつが「心のケア」ではないでしょうか。毎日考えられないような犯罪が次々と、それも日本のいたるところで起きています。利便性と同時に私たちが追い求めてきたのが経済性、それもここにきて世界は行きづまり大変な時代を迎えています。「ものの豊かさ」から「心の豊かさ」へと言われて久しい日本です。でも「心の豊かさ」のための具体的な方策は考えられてきたでしょうか？これも残念ながら・・が現実です。

阪神大震災が起きて、この1ヶ月で14年になります。被災された方にとって心の傷が癒えるのは簡単なことではないと思います。でも日本でボランティア活動が盛んになったのは、阪神大震災後とよく言われます。中越地震などその後の災害時に、ボランティアの方々の活躍や音楽家によるコンサートが報道されることも多くなりました。そんな中で兵庫県の県立ピッコロ劇団によるこんな活動があったことを皆さんはご存じでしょうか。大震

イラスト：仲野順子

災直後の2月から4月まで52回、そして10月から11月にかけての13回、被災地で激励活動や公演が実施されたのです。どうしてこのような活動ができたのか、そしてこの活動がどのようなものだったのかご紹介いたしましょう。

県立ピッコロ劇団は去年創立15周年を迎えた、兵庫県立尼崎青少年創造劇場(愛称ピッコロシアター)所属の劇団です。「箱もの行政」といわれる公立の文化施設の中にあって、珍しくそこで上演されるソフトを持った日本で初めての県立劇場なのです。阪神大震災が起きたときは、設立後1年も経っていませんでした。2回目の公演を1週間後に控えて連日猛稽古の真っ最中の時期だったそうです。劇団員のなかで亡くなった方はいらっしゃらなかったそうですが、もちろん被災されていましたし、職場である尼崎の劇場にたどり着くのにも1日がかりという人もいたそうです。皆若く、精神的にも動揺しており、演劇などしている場合ではないと思ったとしても当然かもしれません。当時の山根淑子館長、故秋浜悟史劇団代表は、公共劇団の役割として、演劇で地域社会に貢献するにはどうしたらよいかを、プロの演劇人のあり方を、ゲスト出演のために東京から来ていた俳優さんを交えて、劇場のスタッフ、若い劇団員全員で話し合ったそうです。なかなか判断できない若い俳優たちに休みを与え、被災地で炊きだしなどのボランティア活動もさせ、ミーティングを重ねて決めたのが、被災地での激励活動でした。それは、茫然自失の中で夢中で行動する大人たち……そんな中で涙すら忘れまったく表情を失った子どもたちやお年寄りを眼のあたりにした劇団員が、「子どもたちに笑顔を取り戻させたい!」と願いを込めて始めた活動でした。「ももたろう」と「大きなカブ」の2班に分かれ、交通機関が途絶したなか、衣装を身につけ、小道具類を手に電車やバスを乗り継いで、時には徒歩で移動しました。はじめは子どもたちに声をかけてもなかなか集まらず、幟(のぼり)を持って歩き回ったそうです。舞台は客席とロープで仕切っただけの寒風吹きすさぶグラウンドでした。それでも「2月11日、最初の校庭での舞台が終わったときの感動は一生忘れない」—劇団員の言葉です。

4月8日まで52カ所で実施された第一次の激励活動のあと延期となっていた公演を、5月に被災者の方々にも足を運んでいただき、実現させたのです。そして半年後、徐々に落ち着きを取り戻した時期に、第二次激励活動、こちらは体育館やホールでの「学校ウサギをつかまえろ」子どもたちが参加して楽しめる舞台を県下の12カ所で上演しています。

激励活動の報告書にこんな小学生の感想が載っています。「拍手をやめるのがいやだった。なんかとってもすごい、いや楽しかった。皆がいる前で、あんなに大きく踊って、表情もやっぱり、ホンマの劇団やなぁと思った。皆の汗がきらきら光ってきれかった。」全身でオニに体当たりしてくる子どもたち、目を輝かせる子どもたち、お腹を抱えて笑うお年寄り・・・劇団員を見つめる被災者の生き生きした表情に、片付けをする劇団員に「ありがとう」とあいさつする子どものひと言に、いちばん感動したのは若い劇団員たちでもあったようです。子どもたちになにが大切か、演劇がなんのために必要かをはからずも体験した団員たちは、地域の人々の中で大きく成長したそうです。そして、このような活動は公共の劇場に専属の劇団員がいたから実現できたことでもあるのです。その後ピッコロ劇団は1998年の芸術祭優秀賞をはじめとして数々の演劇賞を受賞し、昨年はロシアでの公演も実現しています。また、激励活動にヒントを得て、積極的に学校や各地域を訪問しての公演、子どもたちが参加できる公演を手がけています。劇団に場所と時間が与えられれば、その作品と公演の芸術性も高められるし、地域にとっては上質な文化が身近に存在することになります。

全国の公共文化施設専属の劇団やダンスグループを持つ公共劇場は、兵庫県尼崎市のほか、新潟市と静岡県だけです。「心の豊かさ」が大切であるならば、そんな地域がもっと増えてほしいと願わずにはおられません。2001年日本で初めての文化振興のための法律「芸術文化振興基本法」が参議院で可決された日、当時私がキャスターを務めていたラジオ番組で劇作家・演出家の平田オリザさんは「10年前、スポーツは運動神経のある人か好きな人がするものと思われていました。でも、今誰もが歩くだけでもいいから、一週間に一度スポーツをすることは、身体の健康のために良いことを認識するようになりました。これと同じように、一週間に一度でもよいから、演劇や音楽や美術など上質の芸術に触れることは、心の健康のために大切だと思うようになってほしい。10年も経たないうちにそんな時代が来てほしい。」と話してくださいました。体験しないと気づかない……それは、あまりにさびしいのではないでしょうか?「人はパンのみに生きるにあらず」……心が破壊しないうちにと心から願っております。